

大学の機能強化のための戦略的取り組み

「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発と教員養成

ー グローバル化に対応した学校教育の変革を目指して ー」

附属学校園におけるグローバル人材育成の カリキュラム開発

平成29(2017)年度報告書

平成30年7月

京都教育大学

附属学校園におけるグローバル人材育成カリキュラム開発専門委員会

目 次

はじめに	1
I グローバル・スタディーズの概要とふりかえり	2
1. 独自領域「グローバル・スタディーズ」の提案	2
2. 授業開発の手順	3
3. 2017年度のグローバル・スタディーズの成果と課題	4
II グローバル・ヒストリーの成果と課題	6
1. コーディネイター	6
2. 基本的な考え方、モチーフ	6
3. 2017年度のグローバル・ヒストリー公開授業	7
4. グローバル・ヒストリー2017まとめ	8
III グローバル・イシューの成果と課題	9
1. コーディネイター	9
2. 基本的な考え方、モチーフ	9
3. グローバル・イシュー公開授業	10
4. グローバル・イシューのまとめ	13
IV グローバル・エシックスの成果と課題	13
1. コーディネイター	13
2. 基本的な考え方、モチーフ	14
3. 2017年度グローバル・エシックス公開授業	14
4. グローバル・エシックス2017のまとめ	16
V 2018年度に向けて	17
資 料	19
資料1 系統的に並べた公開授業一覧（平成29年度）	19
資料2 附属学校園苑の参加教員募集依頼の文書	20

はじめに

本報告書(ホームページ)は、平成 29 年度における附属学校園での取り組みについての教育研究成果を提示するものである。

平成 29 年度は「グローバル・スタディーズ」の枠組みにより、附属学校園での授業開発を進めた。平成 29 年度の「グローバル人材育成カリキュラム」開発では、グローバル・スタディーズの授業開発への募集案(平成 29 年 5 月作成)に基づいて、附属学校園より授業実践を募集し実施した。グローバル・スタディーズは、各学校段階・学年において、とくに「グローバルな」要素をもつ授業を独自の視点で「括りだして」構成される領域とした。グローバル・スタディーズの「ものの見方・考え方」により、社会や日本・世界のグローバル化という現象を理解し課題探求する力を育成する。

平成 29 年度は、授業担当者と大学の開発専門委員会とが連絡を取り、事前検討会、授業公開、事後検討会を実施し、実践事例集の作成につなげ、カリキュラム開発を進めた。

平成 30 年 6 月 29 (記)

附属学校園におけるグローバル人材育成カリキュラム開発専門委員会委員長
村上登司文

グローバル人材育成プログラム

2017年度の振り返りと2018年度に向けて

I グローバル・スタディーズの概要とふりかえり

浜田麻里（国文学科）

1. 独自領域「グローバル・スタディーズ」の提案

本年度は「グローバル・スタディーズ」という教科横断的な独自領域の設置を提案し、授業の開発を行った。

「グローバル・スタディーズ」とは各学校段階・学年において、とくに「グローバルな」要素をもつ授業（現行の教科・領域の枠内にある）を独自の視点で「括りだして」構成される領域である。またこの領域は、次の3つの主題別授業・単元群（通称「島」）に分けることができる

表1 グローバル・スタディーズの3つの島

島（主題別授業・単元群）	島の説明
(1) グローバル・ヒストリ （以下「ヒストリー」）	グローバリゼーションという現象を、歴史的時間軸（通時性）のなかで多角的に理解する力を養う授業の系列
(2) グローバル・イシュー （以下「イシュー」）	グローバリゼーションという現象を、現在時制（共時性）で理解する力を養う授業の系列
(2) グローバル・エシックス （以下「エシックス」）	グローバリゼーションという現象の深い理解を踏まえて、そこで生起する諸問題を乗り越えるための価値を探究する授業の系列

また、グローバル・スタディーズではこの領域の特質に応じた見方・考え方をを用いて「出会う」「つながる」「ひろがる」と類型化されるような学習を行い、発達段階別目標に示された資質能力を養うことがめざされる。

グローバル・スタディーズにおける見方・考え方は以下の通り。

- ① 人類共通の価値観を踏まえて判断する（公正、平和、人権、寛容、多様性の享受…）。
- ② グローバル化によって生じる様々な現象を批判的に捉え、課題を発見する
- ③ 複雑に絡み合った事象をグローバルな視点から読み解く
- ④ 様々な課題を特定の文化や国に縛られず多元的に捉える
- ⑤ 多様な文化や言語の違いを調整して、他者と協働する
- ⑥ 持続可能な開発のために意思決定を行う
- ⑦ よりよい世界のあり方を構想し、社会参画を通じてその実現のために行動する

また、作業仮説として各発達段階の目標を以下のように提示し、授業開発の中で修正、改善を図ることとした。

表2 グローバル・スタディーズ 発達段階別目標

高校	グローバル化した社会の現状を読み解き、課題を多面的な視点から捉えることができる。また、他者との言語や文化の違いを調整しながら、平和、寛容、包摂、人権等の価値観を踏まえて批判的に思考、判断し、解決を構想することができる。
中学校	グローバル化によって生じる社会的な課題を理解し、多面的に捉えることができる。また、他者との考え方の違いを調整しながら世界の人々がよりよく生きるために批判的に思考し、解決の方法を判断することができる。
小学校 高学年	グローバル社会に見られる課題を知り、課題に対するさまざまな捉え方があることを理解することができる。学習したことを元に、世界の人々とともに生きていくための課題の解決に向けて自らの関わり方を判断することができる。日本語や外国語によるコミュニケーションを通して他者との関係を構築することができる。
小学校 中学年	日常生活のさまざまな事象が世界とつながっていることを理解することができる。言葉や文化のちがいを越えて伝え合い、聞き合うことを楽しむことができる。地域の特色や課題について、知らない人に日本語や外国語で伝えること等を通して、文化の違いや世界と地域の関係を考えることができる。
小学校 低学年	さまざまな国があることを理解することができる。外国語を用いて他者と関わることや、伝統文化を実践することに関心を持つ。言葉で思いを表現し、クラス等身近で起こった問題の解決のために行動することができる。
幼稚園	さまざまな言語や文化があることを理解することができる。言葉で思いを表現することによって、身近な友達との間で起こった問題について、解決のために行動することができる。

2. 授業開発の手順

附属学校園教員は「ヒストリー」「イシュー」「エシックス」の3つの島からいずれか1つを選んで授業開発を行った。大学教員も各島のコーディネータを決め、授業の事前と事後に検討会を行った。コーディネータは以下の通りである。

- (1) グローバル・ヒストリー 齊藤恵太（社会科学科）・神代健彦（教育学科）
- (2) グローバル・イシュー 浜田麻里（国文学科）・村上登司文（教育学科）
- (3) グローバル・エシックス 神代健彦（教育学科）・石川誠（社会科学科）

また、カリキュラム全体の監修を樋口とみ子（教育支援センター）が担当した。

3. 2017年度のグローバル・スタディーズの成果と課題

各島毎の総括は次節からに譲るとして、ここでは今年度のプロジェクト全体の振り返りを行っておきたい。

発達段階	学校段階	出会う	広がる	つながる
発展期	高校			グローバルな課題
充実期	中学校		グローバルな課題	グローバルな社会
基礎後期	小学校 高学年	グローバルな課題	グローバルな社会	日本と世界
基礎前期	小学校 中学年	グローバルな社会	日本と世界	自己と他者
	小学校 低学年	日本と世界	自己と他者	
前基礎	幼稚園	自己と他者		

① グローバル・スタディーズにおける「出会う」「広がる」「つながる」×重なる

これまで「出会う」「広がる」「つながる」×重なる、をカリキュラムの構成原理として開発を行ってきた。一つのテーマについて発達段階をおって「出会う」「広がる」「つながる」のプロセスを経て学びを深めていくというものである。

今年度の授業開発で、各授業開発者にそれぞれの授業が「出会う」「広がる」「つながる」のいずれに当たるかを問うたところ、このプロセスが一つの単位の中の学習段階や授業の段階としても見られることが明らかになった。すなわち、このプロセスはグローバル・スタディーズの基本的な学びの構造で、マクロにはグローバルな認識の育成の過程で見られるが、ミクロには各単元の学習過程でも実現されている。

そこで来年度からはこれを授業開発の手順の中に位置付け直すこととしたい。

② 開発された授業の特性

次頁の表に開発された授業がグローバル・スタディーズの目標としていずれと関連が深いかをまとめた。

全体として、中学校での開発数をもっとも多く、小学校中学年以下の開発数が少ないこと、目標に偏りがあることが見て取れる。目標が適切かどうかとも再検討する必要があると考えられる。

2018年度に向けて、今年度の開発状況に合わせて目標を再度整理すると共に、これまで開発数の少ない部分の開発を促進するようなはたらきかけが必要である。

表3 目標別開発授業数 ※この他に特別支援学校でも授業が開発されている。

	グローバル・スタディーズの目標	授業数
学校低学年	<input type="checkbox"/> 外国語を用いて他者と関わることに関心を持つ。	0
	<input type="checkbox"/> 伝統文化を実践することに関心を持つ。	1
	<input type="checkbox"/> さまざまな国があることを理解することができる。	0
	<input type="checkbox"/> 言葉で思いを表現することができる。	0
	<input type="checkbox"/> クラス等身近で起こった問題の解決のために行動することができる。	0
小学校中学年	<input type="checkbox"/> 日常生活のさまざまな事象が世界とつながっていることを理解することができる。	1
	<input type="checkbox"/> 言葉や文化のちがいを越えて伝え合い、聞き合うことを楽しむことができる。	0
	<input type="checkbox"/> 地域の特色や課題について、知らない人に日本語や外国語で伝えることができる。	0
	<input type="checkbox"/> 文化の違いや世界と地域の間を関係を考えることができる。	0
	<input type="checkbox"/> 考えの違う他者と協働して問題を解決しようとするすることができる。	0
小学校高学年	<input type="checkbox"/> グローバル社会に見られる課題を知る。	1
	<input type="checkbox"/> 社会的な課題に対するさまざまな捉え方があることを理解することができる。	2
	<input type="checkbox"/> 世界の人々とともに生きていくための課題の解決に自分がどのように関わるかを考えることができる。	2
	<input type="checkbox"/> 日本語や外国語によるコミュニケーションを通して、クラスの仲間と関係を構築することができる。	0
	<input type="checkbox"/> グローバル社会に見られる課題を知る。	1
中学校	<input type="checkbox"/> グローバル社会に生じる課題を理解することができる。	8
	<input type="checkbox"/> グローバル社会の課題を多面的に捉えることができる。	6
	<input type="checkbox"/> 他者との考え方の違いを調整することができる。	5
	<input type="checkbox"/> 世界の人々がよりよく生きるために批判的に思考することができる。	2
	<input type="checkbox"/> 課題の解決の方法を判断することができる。	2
高校	<input type="checkbox"/> グローバル化した社会の現状を読み解き、課題を多元的な視点から捉えることができる。	2
	<input type="checkbox"/> 他者との言語や文化の違いを調整することができる。	3
	<input type="checkbox"/> 平和、寛容、包摂、人権等の価値観を踏まえて批判的に思考、判断することができる。	0

II グローバル・ヒストリーの成果と課題

神代健彦（教育学科）

1. コーディネーター

齊藤恵太（社会科学科）

中村翼（社会科学科）

神代健彦（教育学科）

2. 基本的な考え方、モチーフ

グローバル・ヒストリーでは、以下のような認識・背景、モチーフを念頭に、2018年度の授業開発を行った。これらは、グローバル・ヒストリーという「島」で授業開発を遂行することの、現代的・教育的な意義を構成したものである。

① グローバル・ヒストリーという「島」を設定する背景

- ア. 現代のグローバル化社会の特徴は、人やモノ、情報が国境を越えて行き交うところにある。それにともなって日本でも、様々な出自の人やモノに触れ、交流する機会が増えている。
- イ. こうした変化を、長期的かつ広域的な視野から具体的に理解し、対応できる人材を育成するためには、「国」を単位とする歴史認識や知識偏重の歴史教育を補うアプローチが必要とされている。
- ウ. そこでグローバル・ヒストリーでは、国という枠組みを超えた人やモノの交流史をテーマに、家庭科、理科、技術科等との連携を通じて、「触れる歴史」を企図する。

② グローバル・ヒストリーの所期モチーフ

歴史を長期的視野
でみる

ヒトやモノの移動による世界の諸地域の
関係や相互作用を
読み解く

ユーラシア大陸、インド洋世界、地中海世界など、陸や海の単位で世界を構造的に捉える

動植物・食料・道具の伝播など、児童生徒に身近なテーマを積極的に用いる

そして結論から言えば、上記の所期モチーフは授業開発プロセスのなかでより精緻化・発展していくこととなった。以下、その精緻化・拡張の諸相について報告しておきたい。

3. 2017年度グローバル・ヒストリー公開授業

表 4 2017年度グローバル・ヒストリー公開授業一覧

	学校名	日	教科	単元名(教材)	授業者	学年・組
①	附属京都小中学校	7月12日 (水)	社会	アフリカ州	西田 直記	7年C組
②	附属桃山小学校	7月7日 (金)	社会	江戸幕府と政治の安定	諏訪 宏志	6年2組
③	附属桃山小学校	9月29日 (金)	国語	ちいちゃんのかげおくり	井上 美鈴	3年1組
④	附属高等学校	11月18日 (土)	理科	古典を科学する	岡本 幹	1,2年生+聖母女学院の生徒
⑤	附属高等学校	11月25日 (土)	現代社会	(課題研究) 伏見学	山田 公成	1年4組
⑥	附属特別支援学校	2月13日 (火)	音楽	日本・洋・東南アジアの音楽を聴き比べよう	北岡 淳子	高等部縦割り グループ音楽

表4は、2017年度グローバル・ヒストリー公開授業一覧である。件数は6件とやや少なめではあるが、一つひとつの公開授業は、グローバル・ヒストリーのコンセプトに則りつつ、それを精緻化・拡張させる形で展開されたといえる。各授業の詳細については、指導案、事例集、また解題に譲るとして、ここではその「精緻化・拡張」の例を2件ほど紹介しておきたい。

まず、グローバル・ヒストリーの所期コンセプトをほぼ完全に実現しえた事例として、②の附属桃小「江戸幕府と政治の安定」をあげたい。こちらは、小学校6年生社会科の単元中にある「鎖国」について、これを世界との断絶ではなく、むしろ長崎貿易やアイヌとの交易、琉球との交易などという形で世界とつながっていた、という日本史理解を追求するものと理解できる。そのうえで、これを子どもたちに実感をもって理解させるために、当時の交易品であった矢羽を教材としながら、実感的に理解する「触れる歴史」として展開したのがこ

の授業であった。

また、コンセプトの拡張という意味では、④附属高校の「古典を科学する」をあげておきたい。同授業は、「香り」を軸に、ヨーロッパの香り文化、日本の古典文学における香り文化、お香を軸とした日本とアジアの文化史、そしてその「香り」を科学的に分析するという教科横断的な試みであり、実際に香る「お香」を触り匂いを嗅ぐ、科学的に「香り」をつくってみる、などの実感を軸にしたものである。グローバル・ヒストリーでは、この点をもって、本授業を、「触れる歴史」の発展・拡張としての「香りを楽しむ」「嗅ぐ」歴史の授業として位置付けたい。

附属桃山 小学校	7月7日(金)	社会	江戸幕府と 政治の安定	諏訪 宏志	6年2組
-------------	---------	----	----------------	-------	------

授業の特色

小学校6年生社会科の単元中にある「鎖国」について、これを世界との断絶ではなく、むしろ長崎貿易やアイヌとの交易、琉球との交易などという形で世界とつながっていた、という日本史理解。

海でつながる世界

これを、当時の交易品であった矢羽を教材としながら、実感的に理解する「触れる歴史」

触れる歴史

附属高等 学校	11月25日(土)	理科	古典を科学 する	岡本 幹	1、2年生+ 聖母女学院 の生徒
------------	-----------	----	-------------	------	------------------------

授業の特色

「香り」を軸に、ヨーロッパの香り文化、日本の古典文学における香り文化、お香を軸とした日本とアジアの文化史、そしてその「香り」を科学的に分析するという教科横断的な試み。

G世界を理解する知の広がり

実際に香る「お香」を触り匂いを嗅ぐ、科学的に「香り」をつくってみる、などの実感を軸にした授業。

「触る」のバリエーション「嗅ぐ」の実感

4. グローバル・ヒストリー2017のまとめ

以上の振り返りを踏まえて、2017年度のグローバル・ヒストリーの成果については、以下のようにまとめることができるように思われる。とりわけ、大学側コーディネーターとし

では、小中高におけるグローバル・ヒストリー授業の開発が、おのずから歴史学等の学問の最先端の成果と交差することとなったという点は興味深い。この点を意識的に深めることで、附属学校園と大学のさらなる協同性が展望されることと思われる。

所期のイメージあった「触れる」歴史を超えて、「嗅ぐ」「聴く」など、人間が持つ豊かな五感それぞれにうったえる授業が生まれた。

学校種(発達段階別)にかかわらず、授業の工夫が学問の最先端と交差する興味深い現象。

例)「鎖国」は断絶ではない
香りの文化史:フランスの社会史研究

しかしその工夫は、あくまで既存教科の内容を突き詰めた形で提起されており、地に足のついたものだった。

なお、2018年度については、2017年度のこの成果をモデルケースとしつつ、授業開発を継続していくこととなる。その際、2017年度は授業開発が行われなかった学校種、学年、教科でもグローバル・ヒストリーの公開授業が行われることが、系統的カリキュラムの開発には必要と考えられる。合わせて、開発された授業を包括する枠組みについても、大学側のワーキングで一層の検討を深めていきたい。

III グローバル・イシューの成果と課題

浜田麻里 (国文学科)

1. コーディネーター

浜田麻里 (国文学科)・村上登司文 (教育学科)

2. 基本的な考え方, モチーフ

グローバル・イシューでは、以下のような背景に基づき、授業開発を行った。

①グローバル・イシューという「島」を設定する背景

現代のグローバル社会には、環境、人口、貧困、開発、紛争など、数多くの課題が存在する。課題は相互に依存したり対立したりして、複雑に絡み合っている。また、その解決のためには異なる背景をもつ人々が言葉の壁を越えて協働する必要がある。

そこで領域「グローバル・イシュー」ではこういった複雑に絡み合った課題を具体的に取り上げ、グローバルな視点から読み解いたり、多面的・多角的に捉えたりしながら、よりよい世界のあり方を構想し、社会参画につなげるなど、グローバルな社会に求めら

れる資質・能力を養う

②グローバル・イシューの所期モチーフ

所期の授業モチーフとしては(1)平和と戦争・紛争, (2)伝統と文化的多様性, (3)対立の解決, (4)エネルギー, 等が挙げられていたが, 実際にはこれらのモチーフ以外にも多様な授業が開発され, その数は計 14 に上った。

3. グローバル・イシュー公開授業

表5 2017年度グローバル・イシュー公開授業一覧

附属桃山小学校	7月13日 (木)	音楽	祇園祭の音を感じて わらべうたを歌おう	響尾真希	1年2組
附属桃山小学校	12月8日 (金)	音楽	世界のいろいろな楽 器の音色を聴こう	高橋詩穂	5年1組
附属桃山中学校	2月9日 (金)	社会	持続可能な開発	溝部卓司	1年2組
附属京都小中学校	9月6日 (水)	国語	挨拶一原爆の写真に よせて	國原信太郎	7年A組
附属京都小中学校	11月16日 (木)	サイエン ス	福島と共に学ぶ放射 線	野ヶ山康弘	8年C組
附属京都小中学校	7月5日 (水)	サイエン ス	福島から学ぶ放射線	岡田努(T1) (福島大学) 野ヶ山康弘 (T2)	8年A組
附属桃山中学校	12月13日 (水)	国語	文学の中の戦争	松本 圭祐	2年3組
附属桃山中学校	12月15日 (金)	英語・社 会	プレゼンテーション をしよう	津田 優子	2年2組
附属桃山中学校	2月2日 (金)	技術	情報に関する技術	中井 暁	3年3組
附属桃山中学校	2月15日 (木)	国語	君たちはどう生きる か	神崎友子	3年3組
附属桃山中学校	12月4日 (月)	英語	Enjoy Sharing Your Thoughts	黒川 愛子	3年1組 3年4組
附属高等学校	11月25日 (土)SGH-A	現代社 会	(課題研究) 伏見学	山田 公成	1年4組
附属高等学校	11月25日 (土)SGH-A	グロー バル英 語 I	共学、共働	磯部 達彦	1年5組

附属高等学校	11月25日 (土)SGH-A	現代文	共働	菊地 厚子	2年3組
--------	--------------------	-----	----	-------	------

全ての授業に言及することは紙幅の関係でできないため、ここでは特徴的な3つの授業を取り上げて紹介する。

①附属桃山小学校1年生音楽「祇園まつりの音を感じて童歌を歌おう」(響尾真希)

グローバル・ヒストリー授業事例紹介①

附属桃山 小学校	7月13日(木)	音楽	祇園祭の音 を感じて童 歌を歌おう	響尾真希 1年2組
-------------	----------	----	-------------------------	-----------

授業の特色

多様な文化を受容するための基盤として、まず地域の音楽に触れ楽しむ。

多様性、文化の交流・混交の理解の基盤

鉦の音色があるときの感じをクラスで交流

多様な意見の尊重

伝統文化や日本について学ぶことがグローバル人材の育成であるとの誤解が蔓延しているが、両者は直結するものではないことには注意が必要である。附属桃小の音楽科の学年横断的なカリキュラムに於いては、学年進行と共に多様な音楽に触れ、文化の交流や混淆を理解することが目標として設定されている。地域の音楽の親しむこの授業では、小学校1年生段階としてグローバルな視点には全く言及されていないが、カリキュラム上では多様な文化に親しむための第1歩として明確に位置付けがなされている点が評価できる。

②附属京都小中学校8年生サイエンス「福島と共に学ぶ放射線」(野ヶ山康弘)

グローバル・イシュー授業事例紹介②

附属京都 小中学校	継続	サイエンス	福島と共に学 ぶ放射線	野ヶ山 康弘	8年生
--------------	----	-------	----------------	-----------	-----

授業の特色

放射線に関する素朴概念を理科的な見方・考え方で乗り越えた後もなお自身の心の中に残る偏見と向き合う

グローバルな課題の複雑性の理解

福島の若者との交流を通して、福島の課題を「私たちの課題」として捉えなおす。

グローバルな課題に「他人事」ではなく 自らの課題として向き合う態度の醸成

この授業

では、第一段

階では理科教育の一環として放射線に関する素朴概念を理科的な見方、簡化方で乗り越える授業が行われる。しかし、「では、検査で安全とされた福島産の野菜を食べるか」と問いかけられた生徒は、自信の心の仲にすぐに YES と答えられない自分自身を発見する。また、福島の若者との交流の中で「所詮は他人事ではないか」という批判を受け、あらためてグローバルな課題に「他人事」ではなく「自分事」として向き合おうとしていた。このように、グローバルな課題について考えることを通して、課題の複雑性や当事者として取り組むことの重要性に気づいていく展開がなされていた。

③附属高校1年生グローバル英語「京都・伏見を発信」

SGH アソシエート校でもある附属高校では、英語を用いた探求的学習が多く行われている。この授業もそういった学習の一つで、単に地域の文化を英語で紹介するというだけでなく、文化背景の異なる人々にわかってもらうために、文化の異なる人々の視点に立って紹介の仕方を考えることがねらいになっていた。

この学びを通して、多様な視点、多角的な捉え方というグローバル・イシューの重要な要素が取り入れられている。

一方、複数の教科で同様な探求・発信を組み合わせた学びが行われているが、どの教科でも時間不足が課題となっていた。複数の教科が連携して教科横断的な学びを設計することの可能性が示唆された。

グローバル・歴史授業事例紹介③

附属高等学校	11月25日(土)	グローバル共学, 協 ル英語 働	磯部達彦	1年5組
--------	-----------	---------------------	------	------

授業の特色

京都や伏見について文化背景の異なる人々にどのように説明したらわかってもらえるかという視点から発表

多様な視点, 多角的な捉え方

他教科との連携の可能性

教科横断的取り組みへの萌芽

4. グローバル・イシューのまとめ

グローバル・イシューは附属学校の先生方の協力を得て、多くの授業を開発することができた。まずは先生方のご協力に篤く感謝したい。

グローバル・イシューの授業の典型は、教科の内容そのものが「環境」「平和」等のグローバルな課題を扱うものである。しかし、その一方で、教科の内容はグローバルな課題に直接は関わりないが、例えばグローバルリゼーションの中で教科の内容がどのように課題の解決に役に立ちうるかという位置付けを明確にすることで、教科の授業をグローバル・イシューの授業として展開しようという可能性が示された。例えば、附属桃山中学校3年生技術「情報に関する技術」(中井暁)では、プログラミング言語を学ぶに先立って、開発者サイトで公開されている英語(日本語字幕付き)の動画を視聴することにより、当該プログラミング言語が世界中で用いられていること、このプログラミング言語を用いることで世界中の人々との協働が可能になることなどが示唆され、その後続く学習内容がグローバル・スタディーズとして位置づけられていた。

また、同じテーマの授業がいくつか提案され、来年度以降、一つのテーマを異なる学年で扱ったり、教科横断的に扱ったりすることを検討することが必要であるということが示唆された。

IV グローバル・エシックスの成果と課題

神代健彦 (教育学科)

1. コーディネーター

石川誠（社会科学科）

神代健彦（教育学科）

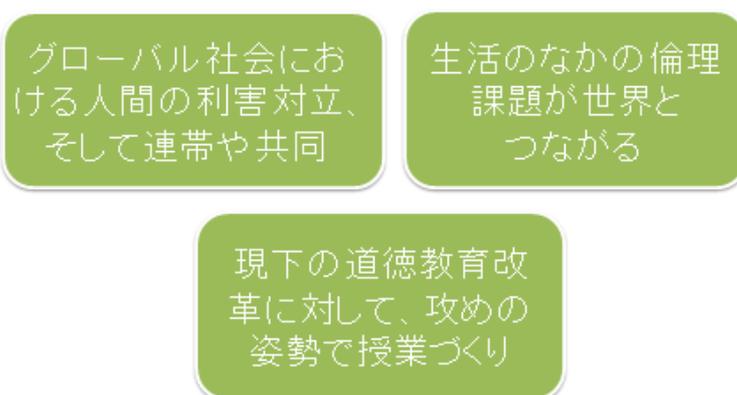
2. 基本的な考え方、モチーフ

グローバル・エシックスでは、以下のような認識・背景、モチーフを念頭に、2018年度の授業開発を行った。これらは、グローバル・エシックスという「島」で授業開発を遂行することの、現代的・教育的な意義を構成したものである。また副次的には、現在小中学校で模索されている「特別の教科 道徳」に対して、グローバル・スタティーズの取り組みをもって対応するという側面もある。

①グローバル・エシックスという「島」を設定する背景

- ア. ヒト・モノ・カネ・情報が地球規模でつながる現代グローバル社会においては、必然的に人間同士のコンフリクトも生じてくる。この人と文化の交わりの新しい段階において必要な道徳や倫理のあり方を、児童生徒ともに探求する授業の開発が必要。
- イ. 「考え、議論する道徳」は、小学校・中学校における新しい「道徳科」の基本的なコンセプトであるが、本グループではこれを「グローバルに考え、議論する道徳」としてバージョンアップさせる。
- ウ. 小中での新しいモラル教育を、いかにして高校段階における新しい教育の取り組みと有効に接続させることを目指す。

②グローバル・エシックスの所期モチーフ



これら所期のモチーフを念頭に、2017年度グローバル・エシックスの成果について、以下まとめていきたい。

3. 2017年度グローバル・エシックス公開授業

表6 2017年度グローバル・エシックス公開授業一覧

	学校名	日時	教科	単元名(教材)	授業者	学年・組
①	附属京都小中学校	2月22日 (木)	道徳	貿易ゲーム～今、私たちにできること～	森脇 正博	6年A組
②	附属桃山小学校	2月5日 (月)	社会	高レベル放射性廃棄物について考えよう	樋口 万太郎	4年2組
③	附属桃山中学校	7月12日 (水)	道徳	飛べなかったハト	中山 莉麻	1年2組
④	附属桃山中学校	11月6日 (月)	道徳	差別やいじめを無くするために何が出来るか	有田 有志	2年2組,3組
⑤	附属高等学校	11月25日 (土)	現代社会	国際化と私たちの課題	高田 敏尚	1年5組
⑥	附属高等学校	1月24日 (水)	グローバル 英語Ⅱ	グローバル・イシュー 国際貿易について	佐古 孝義	2年1組

表6は、2017年度グローバル・エシックス公開授業一覧である。ヒストリーと同じく、件数は6件となった。件数という意味でも、また開発が進んでいない学校種・学年があるという意味でも2018年度の課題は小さくないといえるが、他方で実施された公開授業は多様性に富んでおり、グローバル・エシックスの可能性を示している。

「葛藤(コンフリクト)」に焦点をあてるというグローバル・エシックスのモチーフを念頭に置いて考えれば、①の附属京都小中「貿易ゲーム～今、私たちにできること～」がその典型例と言える。社会科・国際理解教育の教材「新・貿易ゲーム」を用いて、世界の国々が置かれた状況、またそのなかで生きる人々の葛藤を仮想体験するというのがこの授業の内容である。社会科由来の知的な学習が、グローバル・エシックスにおける価値についての学習として再構成されている。

また、道徳教育では、教材の子どもにとってのリアリティがしばしば問題となる。グローバルを念頭においた価値の学習という意味では、その課題性はより大きくなるといえるが、④附属桃山中学校「差別やいじめを無くするために何が出来るか」の授業は、帰国子女学級の子どもたちの経験を、通常クラスの生徒たちが知り、それについて「考え、議論する」道徳科の授業という意味で、それらの課題に正面から取り組むものだといえる。グローバル事象、さらにエシックス(倫理、道徳)という二重の意味で抽象度の高い主題をどのようにリアルな授業へと落とし込むかという点で示唆に富む。

附属京都 小中学校	2月22日(木)	道徳	貿易ゲーム～今、私 たちにできること～	森脇 正博	6年A組
--------------	----------	----	------------------------	-------	------

授業の特色

社会科・国際理解教育の教材「新・貿易ゲーム」を用いて、世界の国々が置かれた状況、またそのなかで生きる人々の葛藤を仮想体験。

グローバル社会の人間の葛藤を知る

社会科教材を道徳教育教材として応用することで、社会科由来の知的な学習を踏まえた価値についての学びを実現。

考え、議論する知的な道徳

附属桃山 中学校	11月6日(月)	道徳	差別やいじめを無くす ために何ができるか	有田 有志	2年2組, 3組
-------------	----------	----	-------------------------	-------	-------------

授業の特色

帰国子女学級の子もたちの経験を、通常クラスの生徒たちが知り、それについて「考え、議論する」道徳科の授業

比較的身近な他者の経験を入り口に差別というG課題を考える

「自分だったら、こうする」という、倫理問題解決へのコミットを導く授業

G倫理課題への問題解決志向を育む

4. グローバル・エシックス 2017 のまとめ

以上の振り返りを踏まえて、2017年度のグローバル・エシックスの成果をまとめたい。大きくは以下の3点が成果と考えている。グローバル・エシックスは、所期のモチーフとして「グローバル世界における価値の葛藤」を挙げつつ始まったが、授業開発プロセスのなかで、「児童生徒の生活経験に即したグローバル授業」というほとんど矛盾した課題にぶつかりつつ、それが実践的に克服されていった点が特筆される。また、エシックス（倫理、道徳）の学習において、いわゆる「心」や「価値」を中心としつつも、他教科の知的な学習との連携ないし横断的な授業が組織されることで、より包括的（コンプリヘンシブ）な価値の教育（授業）のモデルが示された点も強調しておきたい。

所期のイメージあったグローバル世界の倫理的課題について、その抽象性という問題に、児童生徒の生活経験から捉え返すという工夫で対応

「心」というローカルな問題に閉じがちな道徳科に、グローバル社会の諸問題についての学習を織り込むことで、「開かれた知性と心」を育む教科として展開

グローバル社会という、とりわけ小学校では扱いの難しい抽象的な現象を、それぞれの発達段階に応じて教材として定式化する努力

2018年度についても、2017年度の成果を踏襲しつつ、授業開発を継続していくことが、第一の課題となる。また、グローバル・スタディーズの全体構成との関係という意味では、他の島（グローバル・イシュー、グローバル・ヒストリー）との棲み分け、固有性の確認が課題としてあがっていることも付記しておきたい。

※本章は京都教育大学附属学校部合同研究発表会（2018年3月3日（土）於：京都教育大学藤森キャンパス）において報告した内容に加筆してまとめたものである。

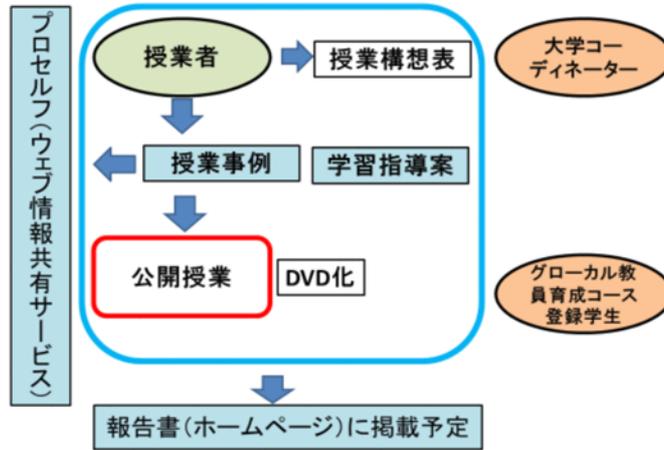
V 2018年度に向けて

2017年度の授業開発に接続して、2018年度においても実践授業の開発を進める。附属学校での公開授業開発数の目安は、附属小中高ともに島（グローバル・イシュー、ヒストリー、エシックス）のそれぞれで1つずつ、計3個以上の開発を目指す。他方、附属幼稚園と附属特別支援学校では、いずれかの島で1つ以上の開発を目指す。

グローバル人材育成のためのカリキュラム開発では、大学と附属学校園が協力してカリキュラム開発を進める必要がある。2017年度のカリキュラム開発についての情報をHPなどで共有化して、2018年度の授業開発を進める。

附属学校園での検討事項として、グローバル人材のカリキュラム開発が附属での教育研究に結びつくように努める。具体的には、2018年度の授業開発においては、授業者を大学コーディネーター中核として、参観者を広げた公開授業となるように、附属学校内で教科担当者の校内研修、または学年担当者の研修機会として利用する。さらに校内研修に結びつくように時間割設定を図る。また各附属学校での研究発表会において、グローバル人材育成に向けた公開授業を一つ入れることを検討する。

大学と附属学校園が連携した授業開発



資料1 系統的に並べた公開授業一覧(平成29年度)

通し番号	データ番号	主題別授業・単元群(通称「島」)	学年	教科	単元名(教材)	授業者	学校園名	公開日	掲載(授業案)	掲載(事例集)	掲載(解題)
1	23	エシックス	小学4年	社会科	高レベル放射性廃棄物について考えよう	樋口 万太郎	附属桃山小学校	2月 5日(月)	○	○	○
2	27		小学6年	道徳	貿易ゲーム～今、私たちにできること～	森脇 正博	附属京都小中学校	2月22日(木)	○	○	○
3	3		中学1年	道徳	飛べなかったハト	中山 莉麻	附属桃山中学校	7月12日(水)	○	○	○
4	8		中学2年	道徳	差別やいじめを無くするために何ができるか	有田 有志	附属桃山中学校	11月6日(月)	○	○	○
5	12		高校1年	現代社会	国際化と私たちの課題	高田 敏尚	附属高等学校	11月25日(土)	○	○	○
6	21		高校2年	グローバル英語Ⅱ	グローバル・イシュー 国際貿易について	佐古 孝義	附属高等学校	1月24日(水)	○	○	○
7	7	ヒストリー	小学3年	国語	ちいちゃんのかげおくり	井上 美鈴	附属桃山小学校	9月29日(金)	○	○	○
8	2		小学6年	社会	江戸幕府と政治の安定	諏訪 宏志	附属桃山小学校	7月7日(金)	○	○	○
9	4		中学1年	社会	アフリカ州	西田 直記	附属京都小中学校	7月12日(水)	○	○	○
10	11		高校1、2年生+聖母女学院の生徒	理科	古典を科学する	岡本幹・川井亮	附属高等学校	11月18日(土)	○	○	○
11	25		1、2年生+高等部縦割りグループ音楽	音楽	日本・洋・東南アジアの音楽を聴き比べよう	北岡 淳子	附属特別支援学校	2月13日(火)	-	-	○
12	5	イシュー	小学1年	音楽	祇園祭の音を感じてわらべうたを歌おう	響尾 真希	附属桃山小学校	7月13日(木)	○	○	○
13	18		小学5年	音楽	世界のいろいろな楽器の音色を聴こう	高橋 詩穂	附属桃山小学校	12月8日(金)	○	○	○
14	24		中学1年	社会	持続可能な開発	溝部卓司	附属桃山中学校	2月9日(金)	○	○	○
15	6		中学1年	国語	挨拶一原爆の写真によせて	國原 信太郎	附属京都小中学校	9月6日(水)	○	○	○
16	1		中学2年	サイエンス	福島から学ぶ放射線	岡田努(T1) (福島大学) 野ヶ山康弘(T2)	附属京都小中学校	7月5日(水)	-	○	-
17	10		中学2年	サイエンス	福島と共に学ぶ放射線	野ヶ山 康弘	附属京都小中学校	11月16日(木)	-	○	-
18	19		中学2年	国語	文学の中の戦争	松本 圭祐	附属桃山中学校	12月13日(水)	○	○	○
19	20		中学2年	英語・社会	プレゼンテーションをしよう	津田 優子	附属桃山中学校	12月15日(金)	○	○	○
20	22		中学3年	技術	情報に関する技術	中井 暁	附属桃山中学校	2月2日(金)	○	○	○
21	26		中学3年	国語	君たちはどう生きるか	神崎友子	附属桃山中学校	2月15日(木)	○	○	○
22	16		中学3年	英語	Enjoy Sharing Your Thoughts	黒川 愛子	附属桃山中学校	12月4日(月)	○	○	○
23	14		高校1年	グローバル英語Ⅰ	共学、共働	磯部 達彦	附属高等学校	11月25日(土)	○	○	○
24	13		高校1年	現代社会	(課題研究) 伏見学	山田 公成	附属高等学校	11月25日(土)	○	○	○
25	15		高校2年	現代文	共働	菊地 厚子	附属高等学校	11月25日(土)	○	○	○

開発授業数

附属京都小中学校	5件
附属桃山小学校	5件
附属桃山中学校	8件
附属高等学校	6件
附属特別支援学校	1件
計	25件

資料 2：附属学校園宛の参加教員募集依頼の文書

「グローバル・スタディーズ」の授業開発への参加教員の募集

グローバル人材育成カリキュラム開発専門委員会

グローバル・スタディーズのカリキュラムを一緒に開発しませんか。

ー授業開発（島づくり）【島とは主題別授業・単元群】への参加教員を募集しますー

○本学の中期計画での位置づけ

【戦略 1 - 3】

戦略名：現代的教育課題に対応できる質の高い能力を持った教員の養成
ーグローバル化に対応した学校教育の変革を目指してー
取組名：グローバル人材育成のためのカリキュラム開発と教員養成
計画期間：平成 28 年度～平成 33 年度（6 年）

○提案の概要と開発手順

幼稚園から大学までの系統的カリキュラム策定をめざす「グローバル人材育成カリキュラム」では、これまで、附属学校園と大学の連携の中で、グローバル人材育成を念頭においた授業開発が進められてきた。今年度は、平成 28 年度までの成果を踏まえつつ、さらなる授業開発の加速、および、教科横断的な独自領域「グローバル・スタディーズ」のカリキュラムについて、その全体像の明確化を進めていきたいと考えている。

「グローバル・スタディーズ」は、各学校段階・学年において、とくに「グローバルな」要素をもつ授業（現行の教科・領域の枠内にある）を独自の視点で「括りだして」構成される領域である。またこの領域を構成する授業群は、3 つの主題別授業・単元群（通称「島」）に分けることができる（図 1、表 1 参照）。

これを開発のプロセスにしたがって整理すると以下のような開発手順となる。

- ①主題系列のもとに、学校種横断的に、関連教科の研究者・教員の授業開発グループ（通称「島」づくりグループ）を組織する。
- ②グループごとに、主題にもとづいて授業を開発する。
 - 平成 28 年度までの授業開発の蓄積に基づいて、すでに開発された授業を全体のなかで位置付けて吟味するとともに、新規の開発を追求する。これまでに開発した授業を「グローバル・スタディーズ」のカリキュラムの中に再度位置付け直して実践を行う。
 - 学校種ないし発達段階別の差異化は、昨年度以来の「出会う」「広がる」「つながる」のステップによって、開発された授業を整理する。
- ③開発された授業群の評価を行いつつ、全体を「グローバル・スタディーズ」として調整・整理する。

図1 グローバル・スタディーズの全体イメージ

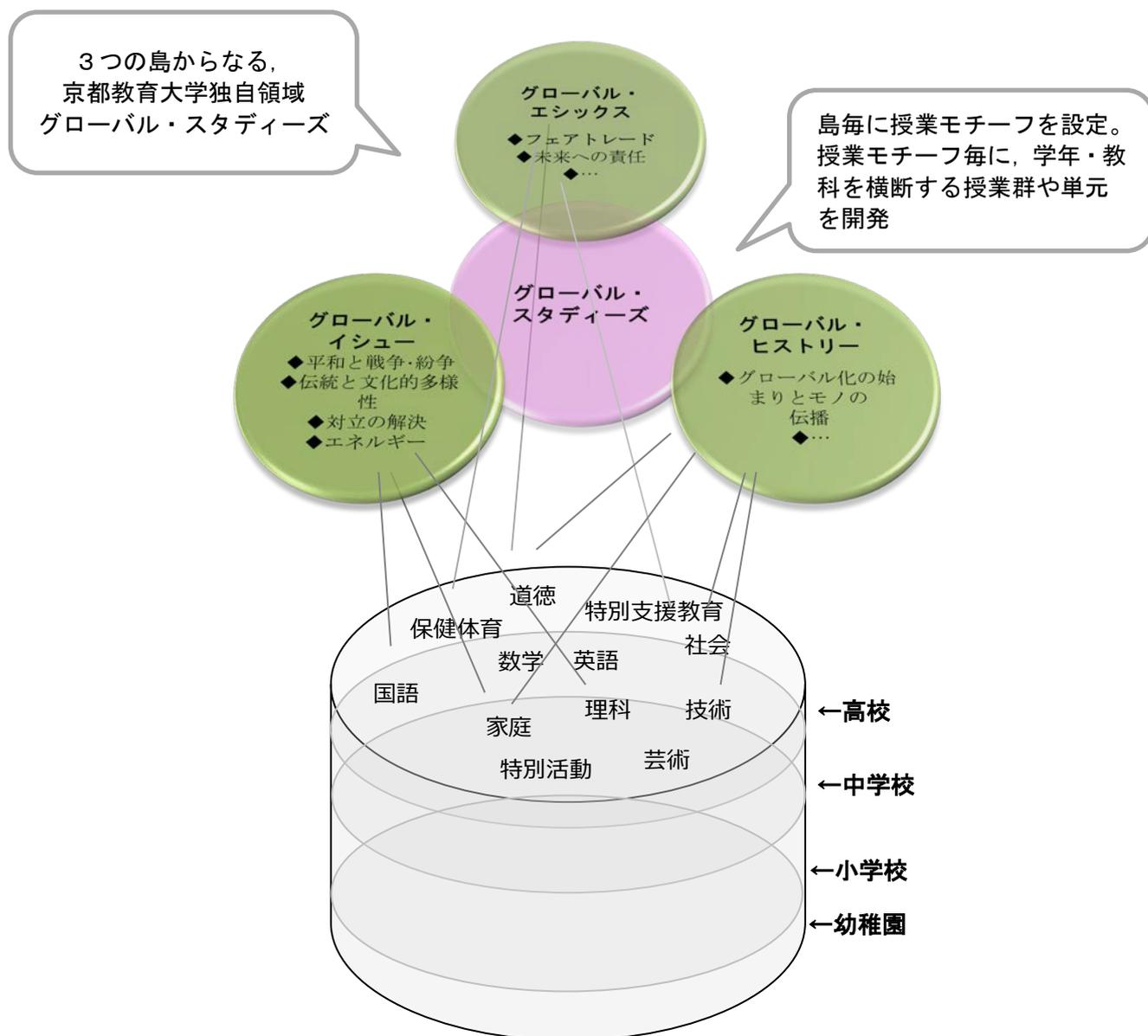


表1 グローバル・スタディーズにおける島の説明

島 (主題別授業・単元群)	島の説明
(1) グローバル・ヒストリー	グローバリゼーションという現象を、歴史的時間軸 (通時性) のなかで多角的に理解する力を養う授業の系列
(2) グローバル・イシュー	グローバリゼーションという現象を、現在時制 (共時性) で理解する力を養う授業の系列
(3) グローバル・エシックス	グローバリゼーションという現象の深い理解を踏まえて、そこで生起する諸問題を乗り越えるための価値を探求する授業の系列

*次期学習指導要領のコンセプトに沿って表現すれば、このように構築された領域の「グローバル・スタディーズ」では、この領域の特質に応じた見方・考え方をを用いて「出会う」「つながる」「ひろがる」と類型化されるような学習を行い、発達段階別目標に示された資質能力を養うことがめざされる。

(1) グループ名：グローバル・ヒストリー（グローバル歴史）

1. コンセプト

現代のグローバル化社会の特徴は、人やモノ、情報が国境を越えて行き交うところにある。それにともなって日本でも、様々な出自の人やモノに触れ、交流する機会が増えている。こうした変化を、長期的かつ広域的な視野から具体的に理解し、対応できる人材を育成するためには、「国」を単位とする歴史認識や知識偏重の歴史教育を補うアプローチが必要とされている。そこでグローバル・ヒストリーでは、国という枠組みを超えた人やモノの交流史をテーマに、家庭科、理科、技術科等との連携を通じて、「さわれる歴史」を企図する。その特徴は以下ようになる。

1. 既存の歴史教育が主に数十年単位の政治動向に着目するのに対し、グローバル・ヒストリーでは数世紀以上にわたる長期的な過程に目を向ける。
2. 日本や世界各国の内部の動向よりも、ユーラシア大陸、インド洋世界、地中海世界など、陸域、海域世界全体の構造的な特徴や変化に目を向ける。
3. 人やモノの移動を通じて諸地域が相互にどのような関連した動きを示したか、諸地域間の関係や相互の影響に目を向ける。
4. 以上の問題について、動植物・食料・道具の伝播など、児童生徒にとって身近で理解しやすいテーマ、できれば文字通り「触れる」ことのできるテーマから始め、さらに宗教や移民、搾取や環境変動といった現代に続く難問への歴史的アプローチを図る。
5. こうしたアプローチを実現するため、社会科、家庭科、理科、技術科、道徳科などの連携を図り、児童生徒が長期的・広域的な歴史過程や各地域の相互関連を意識・理解できるようになることを目指す。

具体的な授業のモチーフおよび各教科連携のイメージは、例えば次の通りである。

2. 授業モチーフ

①グローバル化の始まりとモノの伝播

歴史的に見た場合、グローバル化自体は最近になって始まったことではない。既に15世紀後半以降、いわゆる大航海時代から、人やモノの移動と交流は徐々に地球規模で営まれるようになった。ではグローバル化の初期には、どのような交流や交換がなされたのか。そもそもなぜ交流や交換が始まったのか。私たちの周りには、それを考えるための材料がたくさんある。香辛料や砂糖、コーヒーやお茶、絹製品や綿製品、これらはいずれも現代人にとっては当たり前のモノだが、歴史的には、グローバル化の動因とみなしうるほど渴

望されたモノである。香辛料がない頃の料理を実際に食べてみたり、綿織物が一般化する以前の、ざらざらの服に実際に「触れて」みることで（家庭科）、グローバル化の起点について肌で感じ、考える機会を作りたい。また、星を使った位置測定の知識（理科）や、蒸気機関などの技術（技術科）は、グローバル化がどのように加速していったのかを具体的に理解するための手がかりになりうる。教えることを増やすよりは、家庭科や理科、技術科等で既に教えていることを互いに関連づけることによって、グローバル化という事象に対する児童生徒の感度を高め、理解を深めさせていく方法を模索したい。

（２）グループ名：グローバル・イシュー（グローバル課題）

1. コンセプト

現代のグローバル社会には、環境、人口、貧困、開発、紛争など、数多くの課題が存在する。課題は相互に依存したり対立したりしていて、複雑に絡み合っている。また、その解決のためには異なる背景をもつ人々が言葉の壁を越えて協働する必要がある。

領域「グローバル・イシュー」では、こういった複雑に絡み合った課題を具体的に取り上げ、グローバルな視点から読み解いたり、多面的・多角的に捉えたりしながら、よりよい世界のあり方を構想し、社会参画につなげるなど、グローバルな社会に求められる資質・能力を養う。

2. 授業モチーフ

①平和と戦争・紛争

国語科には戦争・紛争の悲惨さや平和の大切さを訴える作品を扱う単元が学年横断的に存在する。それらの単元の学習と社会科（地理歴史科、公民科）における歴史や国際協調に関する学習を有機的に関連付けた学習を設計する。戦争の背景についての多元的理解、文学作品を通じた平和への思いとそれを実現させるための具体的な構想を連関させながら、平和構築について、発達段階を踏まえて話し合ったり発表したりする。

②伝統と文化的多様性

自らと異なる文化を体験的に知る、日本や世界の伝統文化を音楽・芸術、図工・美術・芸術、生活・技術・家庭科等の学習を通して学ぶ、などを行う。自分が住む地域だけでなく、他地域、他国の多様な文化についてもあわせて学ぶことで、多様な文化に対する敬意や寛容さを、幼稚園から始め、発達段階を踏まえながら段階的に養っていく。

③対立の解決

対立の解決のための具体的な方策について、幼稚園段階における友達との間の身近な問題の解決に始まり、発達段階を踏まえて段階的に養う。教科としては、国語、外国語、特別活動等で扱う。

④エネルギー

エネルギー問題は国連 SDGs（持続可能な開発のための目標）においてもその解決が目標の一つに取り上げられている。またいまだに福島原子力発電所の問題は解決に至っていない

い。社会科、理科、技術科等の学習を有機的に関連させ、エネルギー問題について科学的な知識と社会的な見方を交差して捉え、エネルギー問題の解決には国際協力が不可欠であることを前提としながら、自分なりの解決策を構想し、発表する。

(3) グループ名：グローバル・エシックス（グローバル倫理）

1. コンセプト

ヒト・モノ・カネ・情報が地球規模でつながる現代グローバル社会においては、必然的に人間同士のコンフリクトも生じてくる。このような人びとと文化の交わりの新しい段階において必要な道徳や倫理のあり方を、児童生徒ともに探求する授業の開発が必要である。「考え、議論する道徳」は、小学校・中学校における新しい「道徳科」の基本的なコンセプトであるが、本グループではこれを「グローバルに考え、議論する道徳」としてバージョンアップさせることを狙いとする。また、小中での新しいモラル教育を、いかにして高校段階における主権者教育などの新しい動向と有効に接続させるかを考えたい。

2. 授業モチーフ

①フェアトレード論

わたしたちの生活を支えているさまざまな商品は、グローバルなネットワークのなかでつくられる協働の産物といえる。しかしそんなグローバルな商品生産は、経済的な弱者からの搾取という負の側面をしばしば持っている。フェアトレードとは、発展途上国の作物や製品を適正な価格で取引することによって、生産者の生活向上を促す仕組みといえるが、そのような仕組みについて知り、考え、議論することは、グローバル社会を生きる子どもたちに相応しい道徳性や倫理の育成に資すると考えられる。

具体的には、例えばカカオやコーヒー豆、茶やコットンなど子どもたちの身近な商品を主題に、道徳科、社会科、家庭科などの教科の連携を図り、「商品生産のグローバルな理解」+「「フェアネス」という道徳的価値の理解」（内容項目c「公正、公平、社会正義」）という複合的な学習目標を追求していきたい。

②未来への責任：「核のごみ」を考える

生活を営む限り、かならずついてまわる普遍的な問題の一つに、生活からでる「ごみ」をどのように処理するか、というものがある。そんなごみ問題には大小様々なものがあるだろうが、なかでも例えば、いわゆる「核のごみ」をどのように処理するかという問題は、その策を誤れば人類や地球環境に取り返しのつかない悪影響を与える可能性があるという意味で、極めて深刻かつ危急の問題といえるだろう。

そしてこれは、科学技術の問題であると同時に、その恩恵に浴しながら生きるわたしたちの、未来への責任という倫理的な問題でもある。社会科や理科の学習を通して、この問題についての認識を深めつつ、グローバル社会を生きる人としての、責任（内容項目A「自主、自律、自由と責任」）のある選択を模索するような授業を構想したい。

*その他、道徳科を中心に、社会科、理科、技術科、家庭科、保健体育にまたがる授業開発を構想中。

■「島づくり（授業開発）」参加教員の課題

- 募集説明文にある島（主題別授業・単元群）のモチーフに対応した授業実践を開発する。
- 平成 29 年度内に最低 1 回の公開授業を行う。公開授業に於いては指導案を作成する。
- 島づくり（授業開発）（3 つ）のいずれかで主にメールを通じて情報を交換し、必要に応じて研究会を開くことがある。

■平成 28 年度のカリキュラム開発の実績

表 3：H28 年度実績 附属学校園での公開授業など (H29.3.2 まで)

	幼稚園	桃小	桃中	京都小中	高校	特別支援	計
授業計画数	未	9	9	18	18	3	57
公開授業等実施数	3	8	10	7	13	1	42 [73.6%]
授業指導案数	3	5	6	8	6	1	27(64.2%)
FC作成数	3	8	7	5	6	1	30(71.4%)
DVD作成数	3	7	10	6	7	1	34(80.9%)

注：[] 内は計画達成率、() 内は作成率を示す。

■平成 29 年度の予算措置

本学の学内状況として、グローバル人材育成カリキュラムの作成が急がれているため、附属学校園への経費配分は、「島づくり」への参加・協力と授業数に応じて配当を行う予定である。